
君のミライと時の声- 1

藤井秀央

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君のミライと時の声 - 1

【Nコード】

N5226E

【作者名】

藤井秀央

【あらすじ】

紅羽正文は何かに出会っている。それが何かは誰も知らない。学園物であり、ファンタジーでもあり、時には恋愛模様も？日常と非日常の境は何処なのか。そんな、ちよっぴりシリアスな物語。

壱話　此処から始まる物語

世界には二つのことしか無い。
幸福と不幸の二つだけ。

そう、生きる不幸と死ぬ幸福……………それだけのこと。

ふと、目を醒ますと、いつもと同じベッドの上。なにか変な夢を見たような気がしたが、それもすでに遠い記憶となりつつある。

今日は、高校の入学式。やっと、この俺、紅羽正文は、義務教育とか言う、ルールという名のロープで固く縛られた世界から抜けだし、自由という名詞（形容動詞だったかな？）が良く似合う、素晴らしい世界に足を踏み入れることになった。皆で汗を流し、共に笑い、共に泣く。なんて、暑苦しいことをしようとは思わない。青春なんて、正直どうでもいい。まあ、恋愛の一つや二つぐらいならしたいとは思う。俺だって男なんだし。

とか、考えてたが壁の時計を見ると、既に8時を回っている。そろそろ支度をしないとまずいな。

入学式の日から寝坊して、走って学校に向かう途中、曲がり角で、女の子にぶつかって……………それが同じクラスの子だった。なんて、漫画みたいな展開にはしたくないからな。

なんて思いつつ、俺はおもむろに、まだ少し大きめの制服に腕を通した。

辺りが、朝の喧騒に包まれる中を、俺は黙々と歩いてる。幸い、家から学校まで徒歩で行ける程の距離なので、すぐそこに見える駅に吸い込まれる人混みに雑じる必要は無い。毎朝あれだと大変なんだろうな、と心配する余裕すらある。

逆に、吐き出される人達に目を向けると、俺と同じ制服を着た人の固まりが幾つかある。

なんてぼーっと考えてると、いきなり後ろから肩を叩かれた。少し驚きながら、振り返ると、そこにあるのは、良く見知った顔だった。

「なんだ、山崎か。」

中学から三年間同じクラスだった山崎だ。

「なんだとは、なんだ！朝っぱらからシケた顔しやがって。」

「別にシケた顔をしているつもりは無いんだがな。朝だからじゃないのか。それにしても、お前はいつもいつもテンションが高いな。」

どうやったら、そんなに毎日楽しそうに過ごせるのか聞きたくなるくらいに、常にハイテンション、超ポジティブシンキングなやつだ。とかなんとか言ってるうちに、学校が見えてきた。

掲示板に張り出された、クラス分け。膨大な文字の羅列から自分の名前を探し始める。「俺の名前は……………」

式話く新たな世界への階段く

5分程で自分の名前を見つけ、隣にいる山崎に聞いてみる。

「お前はどこなんだ？」

「六組だけど、正文は？」

「よりによって、お前と同じか……。」「これで、四年連続で同じクラスだ。」

「よりによってってなんだよ。少しは喜べ。」

「ばーか。」

さて、そろそろ教室に向かうとするか。

「おい！ちよつと待てよ。馬鹿って言うな！」

山崎がなにか騒いでるようだが、どうせ三分も経てば鎮まる。カッブ麺と勝負させたい位だ。

そう思いながら、この学校への階段に足を踏み入れてしまった。

階段を四階まで登り、やっと、これから一年間過ごすであろう、一年六組へとたどり着いた。

黒板に貼ってある座席表を見ると、>1番、紅羽正文<の名前をすぐに発見できた。俺の名前は>あかう<なので薄々感づいていたが、やはり出席番号は1番だった。だから勿論、席も、窓際の一歩前だ。誰でもそうだと思うが、前の方の席は好きじゃない。なにかと面倒なことが多いからな。そして山崎の席は、当然廊下側の後ろの方である。

まあ正反対だ。とりあえず席に座り、今日提出する書類などを、かばんから、机にぶち込んでいると、間もなく、四十歳位の何の変哲も無いおじさんが入ってきた。

「出席を確認しつつ、皆さんに自己紹介をしてもらいます。」なん

か嫌な予感がする。

「では、出席番号1番の生徒から順に自己紹介をしてください。」
はい、予感見事に的中です。なんて喜んでる場合じゃない。自己紹介かぁ……………。

参話く偶然と必然く

「えっと、紅羽正文です。趣味は……………」
さて、困った。趣味なんて無いのにな。適当に言っておけば良いかな。

「読書です。よろしく。」
読書。本なんか滅多に読まないけど、まあいいや。別に何も困ることとは起きないだろう。

さて、次は後ろの女子だな。

いわぶきひじり
「岩路聖」

え！？ なにかとてつもなく冷淡で、無駄の無い音が聞こえた
……………のかな？

「……………趣味は読書。」え！？ 思わぬところで、趣味が一致して
しまった。

「……………年齢は15歳。」

えっと、そりやそうだろうな。皆タメなのに歳言ってもね（笑）
そういえば、まだ俺は岩路さんの顔を見てない事に気付いた。なんか硬直してたみたいだ。恐る恐る後ろを見てみると……………あれ？
なんか、綺麗な顔立ちの、少女がちょこん、と座っている。
って、いつの間に座ったんだ！ そんな物音が聞こえなかったのは、俺に原因があるのか、それとも……………。

「……………どんな本が好きなの？」
「うえっ？」

驚きのあまり、裏返りに裏返りを重ねたような、とても文面には著せなさそうな音が、俺の喉から発せられた。気付けば俺は、岩路さ

んのことを、見つめていたようだ。

やばい。なんて答えよう。分からない。誰か有名な人の名前で凌ぐか。出てこい、出てこい。

そして1番初めに、俺の脳から出た名前は……………。

「芥川龍之介かな。」これだった。確か中学の現代文でやったような気がする。

「芥川龍之介は私も好き。」

四話　～幸運な不幸～

マジか!!

どうしよう。内容とか言われても、分からないからな。また凌ぐしかないのか。

「私は、羅生門、河童、鼻とかが好き。あなたは？」

……………???

「えっと……………羅生門は好きだよ。」

適当万歳。羅生門って何だっけ？

「芥川龍之介の作品のどんな所が好きなの？」

「作風かな。」

「河童は、28号が狂ってると思う？ 私たちが狂ってると思う？」

「に、二十八号。」

「……………？」

「……………」

もう10分以上質問をされつづけただろうか。今まで切り抜けてきたが、正直もう無理だ。って時に、良いタイミングで、今の俺にとっては幸運のような、不幸がやってくるのであった。

「紅羽！岩路！ もう自己紹介終わってるんだがな。」

はい。担任です。

担任サンキュー！

遠くのほうで、山崎が笑いながらこっちを見ている。なんか妬けにム力つくのは気のせいだろうか？

「はい。じゃあ私も自己紹介します。えー、一年六組の担任になった、大谷です。一年間よろしく。」

その後、入学式も無事終わり、山崎と共に帰途についていた。
「なんだなんだあ。いきなり女の子狙いでいったのか？ 羨ましいな。」

山崎がにやけながら、厭味っぽく、話し掛けてくる。

「違うから。馬鹿じゃないのか。」

「だから、馬鹿って言うな！」

とりあえず、三分待ちましょう。

三分経つ前に、俺の住むマンションに着いてしまったので、山崎の機嫌が治らぬまま、別れを告げた。

伍話　孤独な部屋へ

5階まで、階段で昇るのは、毎日のことではあるが、やはり辛い。しかしながら、毎日続けることは、当然、適度な（？）運動になる。そのおかげかは、定かではないが、案外体力はあるほうだ。中学の頃は、部活動には所属していなかったが、100m走は、クラスで三番目に速かった。

やっとの思いで、扉の前にたどり着くと、ポケットから、乱暴に鍵を取り出し、鍵穴に差し込んだ。

簡単に開いた扉を入ると、靴が一つも見当たらない、その割には埃の溜まった、玄関が姿を現す。

左側の棚の上には、仲の良さそうな四大家族の写真が飾られている。父親、母親に挟まれるように、幼稚園生と小学校中学年ほどの、子供二人が挟まれるように、写っている。写真の左下の日付は、今からちょうど、10年前である。そこに置いてある物は、その写真一枚だけである。それよりも、新しい写真は、この家には一枚もない……。

正文は、その写真から目を逸らすように、靴を脱ぎ捨て、足速にリビングへと向かった。

勿論、リビングには誰も居ない……。

少し運動をすれば、喉が渴くのは、当たり前前の事である。当たり前過ぎて、喉が渴いた理由なんて、気にもしないが、渴きを潤す必要を感じたので、正文は、冷蔵庫からコーラを取り出し、勢いよく飲み始めた。階段を昇る事が、毎日の事なら、それと同時に、この行為も毎日の事になるのだった。飲み終わると、自分の部屋に入っていた。

六話　今の俺が生まれた日

「お母さん、早く行こうよ。」

興奮しながら、急かすように言った。

俺は、紅羽正文、5歳。

今日は、家族で旅行に出掛ける日だ。いつもより早く起きて、準備も整っている。

「ちよつと待って。お父さんが、まだ支度出来てないから。」

隣にいる小学3年の兄は、まるで、いつものことだ、と言いたげに、平然と座っていた。

「悪い、悪い。」お父さんも、いつものように、何食わぬ顔で、家から出てくる。

そして、いつものように、車に乗り込む。

それから数時間。

千葉県の大九里町に着いた。

今は、8月。夏真っ盛りのこの日に、大九里まで来たのだから、することはただ一つ。

そう海水浴である。

着くと同時に、俺は水着に着替え始めた。

すぐに着替え終わると、海に向かって走り出す。

その後を追うように、兄も駆けてくる。

俺達は、足の着く、浅いところで、遊ぶ。

お父さんとお母さんは、昔から、トライアスロンをやっていたらし

く、俺のことは、兄に任せて、沖の方まで泳いで行った。

「お昼までには戻って来るからね」お母さんは、そう言った。

その言葉を信じ、俺達は、水を掛け合ったり、岩場で蟹や貝を捕ったり、砂浜でお城を造ったりして、昼まで遊んだ。

12時になったが、まだ二人は戻って来ない。

1時になっても、まだ二人は戻って来なかった。

2時になり、不安とお腹の鳴りが、ピークに達しても、二人は戻って来なかった。

その後、二人が見つかることはなかった。

住んでいた家の、家賃など、払えるはずもなかったが、たまたま、叔父が、二つのマンションを借りていたので、その内の一つに、兄と二人で暮らすことになった。

それから、俺は、外出が嫌いになった。いつも、家にいた。自分の部屋の天井をみつめていた。

七話　あの日の天井

「……ふみ。…さふみ。おい、正文。」

ふと、目を覚ますと、目の前に兄貴がいた。

「正文。飯出来たぞ。」

「ああ。」

まだ眠気が覚めないまま、ベッドから起き上がる。どうやらあの後、寝てしまったようだ。

俺の頭の上には、あの日と同じ天井がある。

時計を見ると、もう7時だ。帰ってきたのは、1時過ぎだったから、それから6時間も寝てたみたいだ。

いろいろと、することもあったが、もう過ぎてしまったことだから、どうしようもない。

とりあえず、飯を喰おう。あの天井から逃げるように、ダイニングへ向かう。

テーブルの上には、ナポリタンに唐揚げ、フライドポテト、ハンバーグと、見るからに、カロリーの高そうな物が並んでいた。

「なんじゃこりゃ!!」

思わず声をあげてしまった。

「今日は、入学祝いに、正文の好きな物ばかり作ってみたんだ。美味しそうだよ。」

「体に悪そうだな。」

「うう。……確かにそうかもしれないな。」

なんか兄貴が落ち込んだ。じまった。

飯を喰い終わり、気のせいかもしれないが、腹の底が油の膜で覆われているみたいだ。

なんとなく、動きたく無かったので、今日は早めに寝ることにした。

あの天井を見上げながら。

また、来てしまったの？

こちらの世界へ。

あの時言っただけなのに。二度と来ない方が良く、って。

でも、あなたは毎晩来てしまう。

そんなにこちらの世界が好き？

それなら……………。

七話　あの日天井　（後書き）

続く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5226e/>

君のミライと時の声- 1

2010年10月28日03時00分発行